



マルハナバチってどんなハチ？

今回は、実は身近な昆虫であるマルハナバチの特集です。

- マルハナバチは、ハチ（膜翅）目ミツバチ科の一群の総称で、集団で社会生活を営みます。旭山記念公園では6種が確認されています。
 - ミツバチやスズメバチ同様、女王、雄、働きバチで形状が違います。
 - 大きさは女王が15～22mm、雄と働きバチが10～12mm前後です。
 - 人を刺すことはほぼありません。ただし、万が一刺された場合は、アナフィラキシーショックには注意してください。
 - 体つきが丸っこく、体がモフモフのカラフルな毛に覆われているのが特徴で、種によって色合いが違います。
 - 体が毛深いために花粉がつきやすく、花から花へと飛び回することで植物の受粉に貢献しており、自然界では重要な役割を担っています。
 - 長い口は花の蜜を吸うのに都合よくできています。
 - 巣は、地中や倒木の陰など、地面が目立たない場所に作ります。
 - 丸っこい体の割に翅が小さいことから、かつては航空力学的にみて飛べないはずとまで言われていました。飛べる秘密は、大きな胸部にある発達した筋肉で、それにより毎秒200回以上も羽ばたきが可能なことと、空気には粘りがあり、その羽ばたきでできる空気の渦を利用して飛んでいる、ということです。
 - マルハナバチは、働きバチが巣の中で幼虫の体を温めて育てるという、他のハチにはない驚くべき生態が報告されています。働きバチが自身の胸部にある筋肉を震わせて発熱し、幼虫を抱きかかえて熱を伝えるというものです。
 - マルハナバチを「クマンバチ」「クマバチ」と呼ぶ人がいますが、まったく別の種類です。北海道ではクマバチはごく少なく、旭山では未確認です。ただし、基本的に人を刺さないのは同じです。
 - ◎旭山で見られるマルハナバチを、右の写真の上から順に紹介します。
 - ◇エゾオオマルハナバチ：旭山で最もよく見られ、いちばん大きい種です。4月から秋まで見られ、地面近くにいてもよくあります。
 - ◇エゾコマルハナバチ：雌と働きバチはエゾオオマルハナバチに似た色合いで小さくした感じですが、初夏に見られる雄はレモン色におしりの先が橙色のきれいな色合いが目立ちます（写真は雄）。
 - ◇エゾトラマルハナバチ：腹部の虎模様がくっきりしています。旭山では初夏から盛夏に比較的好く見られます。口がとりわけ長いです。
 - ◇アカマルハナバチ：旭山では少なく、7月には見られなくなります。
 - ◇ニセハイイロマルハナバチ：旭山で時々見られます。「ニセ」ではないハイイロマルハナバチは旭山では未確認ですが識別が難しいです。
 - ◇セイヨウオオマルハナバチ：おしりの先が白く目立ち分かりやすい種です。元々ビニールハウスでトマトなどの受粉に用いるためにヨーロッパから人為的に持ち込まれた特定外来生物で、在来種との軋轢が懸念されています。ここ数年旭山でも増えてきました。
 - 昆虫やハチが苦手な方も、ぜひ注目してみたいはかがでしょうか。
- ※参考文献：「蜂の奇妙な生物学」光畑雅宏（著）／COCO（絵） 技術評論社



旭山野鳥メモ番外編④ イソヒヨドリ

イソヒヨドリ Blue Rock Thrush *Monticola solitarius* スズメ目ヒタキ科
北海道で夏鳥、本州以南で留鳥。元々海岸岩礁地帯に住むが、1990年代以降本州方面では内陸にも進出。今では首都圏や関西圏では内陸部の都市の街中でも見られ、民家にも営巣を始めた。鉱山やダム湖周辺でも見られる。岩礁や防波堤・消波ブロックのない砂浜には来ない。

雄はよく通る澄んだ声で節を変えながら囀る。最近なんだかきれいな鳴き声の野鳥が街にいるということでも話題に上がるようになっている。

ユーラシア大陸とその周辺に広く分布するが、日本以外では山岳岩礁地帯が主な生息場所で、群れは作らず単独で暮らし、学名には「山」と「孤独な」という意味の言葉がつけられている。英名は「青い岩のツグミ」。

雄(右写真上)は体の上半分が青く「幸せの青い鳥」と呼ばれるようになったが、生息環境に行きさえずれば他の青い鳥3種よりは見られる機会は多い。雌(右写真下)は全身灰色がかった水色にゴマ塩模様。ヒヨドリと名がつくもののヒヨドリ科ではなく、外見からその名がつけられたが、雌は遠目に見れば形や色合いが似てなくもない。かつてはツグミ科に分類されていた。

道内では積丹半島に多く、函館西部地区では重要文化財の屋根にとまる姿も見られる。札幌ではまだ継続的な観察記録はないが、内陸のダム湖周辺に定着するかもしれない。いずれ旭山でも見られるか？

本州では留鳥であることもあり、おなじみの野鳥になってきているが、北海道ではこれから注目度が高くなる野鳥ではないだろうか。まずは道内でも内陸部に繁殖地が広がってゆくかどうか、経過をみてゆきたい。



2026年7月の野鳥トピックス

- シマエナガ：6月後半から観察機会は少なくなっています
- アオバト：鳴き声が聞かれ姿が見られることもあります(右写真)
- オオルリ：囀りは朝に聞かれますが姿は見つけにくいです
- キビタキ：園内数か所で囀りがよく聞かれ探せば姿も見られます
- コサメビタキ：例年7月中旬に幼鳥が出ており今年も期待です
- シジュウカラ、ヤマガラ：成鳥と色が違う幼鳥が見られています
- クマゲラ：近くで見られる機会もときどきあります
- オオアカゲラ：ときどき見られています



旭山ミニ生き物図鑑2026年7月

6月中に大量発生し木の周りをひらひら飛んでいた白い昆虫は、蝶ではなくキアシドクガ。幼虫に葉を食べられたミズキは一時葉がなくなりましたが、6月下旬には新しい葉が出てきました。キアシドクガは毒蛾と名がつきますが毒はないそうです。



羽化したてのキアシドクガ



幼虫に葉を食い尽くされたミズキ



新たに出来たミズキの葉



エゾリス久しぶり



メスアカミドリシジミ今年も現る



ナワシロイチゴの花、木苺になる



トドマツ球果松ぼっくりにはならない



公式サイト

「アカゲラ通信」 第152号 2026(令和8)年7月3日発行

(公財)札幌市公園緑化協会 旭山記念公園管理事務所

<https://www.sapporo-park.or.jp/asahiya/>

〒064-0943 北海道札幌市中央区界川4丁目

電話 011-200-0311(金・土・日・祝日 10時~16時) FAX 011-200-0351